

消防器廃棄、液肥の肥料化

人間のし尿を液体の肥料（液肥）として活用する農業に取り組んでいる福岡県椎田町で、新たにリサイクルの試みが成果をあげている。使用期限が切れた消防器の消火薬剤をし尿と混ぜ、液肥の成分強化を図るというものが、農家にも好評だ。関係者の間では九州初の消火薬剤リサイクル処理工場建設の実現への期待が高まっている。

福岡・椎田で実証実験



町内の椎田干拓地には約100haの農地が広がる。その一角で大型の有機液肥散布車が縦横に走り回っていた。地元農家の田中祐輔さん（59）は「液肥を使う前と比べ、肥料代が5分の1になった。我々が生き抜く道はこれしかない」と力説した。11月は高菜とレタス、今日は麦の栽培をしている。

同町では94年から液肥製造センターが稼働、約1万2千人の町民のし尿でできる年間約1万トンの液肥を使い始めた。

液肥は散布車1台分の2・5t当たり、散布代金も含めて100円と格安だ。ただ、肥料の三大栄養素のうち、窒素とカ

リウムの含有量は豊富だが、リンが少ない。

「安価なリンはないものか」。インターネットで探し当たったのが、大手消防車メーカー「モリタ」（大阪市）が開発してしまもない消火薬剤リサイクル肥料「モリタ1号」だ。水溶性でリンの含有率は24%と高く、価格も通常の約半額だ。

2年目の今年は、経済産業省の「循環型製品・システム市場化開発事業」の研究対象に選ばれた。昨年は麦とレタス、高菜を対象に実施、同町産業課の田村啓二施設係長は「肥料全体としてのバランスが改善され、成長や色具合などが明らかにいい」。

循環研究所、佐賀大など「消防器肥料リサイクル共同研究会」を発足。液肥に混ぜてその効果と安全性の実証試験に昨年から取り組んでいる。

新リサイクル 成果上々

成分強化し安上がり

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

同社はかつて、耐用年数とされる8年ごとに消火薬剤を産業廃棄物として処理してきた。全国で年間約1万t（約380万本分）にのぼる量を約1億円で処理していた。

消火薬剤の主成分は窒素とリンで、同社は2000年秋から肥料化に着手。難関の水溶化技術を確立し、02年10月に肥料登録の認可を受けた。

同町は同社に打診し、同社とNPO法人「地域

回収だ。使用期限切れの消防器をモリタの処理工場がある三重県まで送るのは輸送経費がかかる。

同町は処理工場を誘致し、九州全域からの消防器回収を夢見る。05年度の経済産業省のエコタウン事業に申請する予定だ。

「全国液状堆肥利用者協議会」（静岡県）によると、椎田町のような液肥製造センターは全国で224所あり、このうち17